

## P1-46

## JCHO若狭高浜病院における薬剤師による地域活動

野田学、稲葉光俊  
JCHO若狭高浜病院 薬剤部

## 【はじめに】

地域包括ケアシステムにおいて、薬剤師にはその担い手として幅広い役割が期待されており、その中の1つが地域住民に対する医薬品をはじめとする医療情報の啓発・教育活動である。また、JCHOは中期目標にて「予防・健康づくりの推進」として、「地域住民に対する健康教室の開催や各種予防接種の実施などを通し、生活習慣病予防をはじめとする地域住民の主体的な健康の維持増進を図ること」を掲げている。今回は、当院における薬剤師の地域活動について報告する。

## 【活動内容】

- ・ 出前講座・当院の地域包括ケア活動の一環として実施しており、1つの講座を薬剤師が担当。各地区の高齢者サロンにて、2017、18年度で計14回実施
- ・ 健康マイスター養成講座-健康に詳しい町民を育て、地域の暮らしの中で自ら健康になり、かつ家族やご近所さんまで健康にする「健康マイスター」の養成を目的とする講座。当院と高浜町、福井大学との共催にて年1回実施しており、講師役として参加
- ・ たかはまコミュニティケアコンソーシアム-高浜町では2017年度より、地域活動を行う町内の医療介護施設や町役場内に「コミュニティケアセンター」を設置し、その連合体である「たかはまコミュニティケアコンソーシアム」を設立。その一員として、中学校での地域医療・介護特別授業、けっこう健康！高浜☆わいわいカフェ、地域診断&クイズ大会等の企画運営
- ・ 薬剤師向けWeb媒体での連載-地域での活動内容を中心としたコラムをフォーマトリビューンwebにて2018年6月から2019年3月まで月1回連載

## 【まとめ】

病院薬剤師の業務は入院患者が主な対象であり、地域に出て活動することでたくさんの気づきを得られている。Web媒体での連載では、当院の活動を広く広報し、共有することができ、多くの反響をいただいた。今後ともこれらの活動を継続し、地域の「予防・健康づくりの推進」に積極的に関わっていききたい。

## P1-47

なんかいい！！南海健康まつり  
～地域医療推進にむけた糖尿病チームの取り組み～

谷口公章<sup>1,2</sup>、河野智恵美<sup>1,6</sup>、井芹康貴<sup>1,4</sup>、成松聖<sup>1,5</sup>、山鼻深愛<sup>1,3</sup>、久保田忍<sup>1,3</sup>、  
葉田昌生<sup>2</sup>、森本章生<sup>7</sup>

<sup>1</sup>JCHO南海医療センター 糖尿病チーム、<sup>2</sup>薬剤部、<sup>3</sup>看護部、  
<sup>4</sup>リハビリテーション科、<sup>5</sup>栄養科、<sup>6</sup>事務部、<sup>7</sup>院長

当院がある大分県佐伯市は九州一広い面積があり、人口約7万人、高齢化率は40%と越え、急速に高齢化が進んでいる地域である。なんかいい！！南海健康まつりは2014年より糖尿病チームが主体となり世界糖尿病DAYにあわせ開催し、2018年で合計6回開催することができ病院行事へと発展した。今回までの取り組みについて紹介したい。糖尿病チームは月1回チームカンファレンスを開催し患者情報の共有し教育パス入院など各職種が連携し活動している。健康まつりは地域市民の皆様の健康についての情報発信を目的として企画し1～4回は平日、5回目からは働き盛りの方にも参加を促すため土曜日に開催した。ブース数は血圧・血糖測定、フットケア、骨密度、栄養相談、運動相談、くすり相談、介護相談、教育講座のブース数であったが、第6回では体組成、血管年齢、がん検診、サプリメント相談、みそ汁塩分測定、老健見学ツアー、共催メーカーが追加されブース数を19とし、開催場所については隣接する老健施設のデイルームを利用し開催することとした。教育健康講座では当院常勤医師等に依頼し、糖尿病、尿酸値と心疾患、下肢静脈瘤、頸尿、乳がん検診、腎臓などより興味を持ってもらえるよう演題を企画した。広告としてはホームページへの掲載、市報やケーブルテレビなどでCM、公民館や調剤薬局でのポスターの掲示を依頼し、参加を促した。参加数は1回76名、3回148名、6回190名を徐々に増加した。参加者に対して行ったアンケート調査では骨密度や体組成など機器の台数やフットケアなど一人当たりの時間を要するブースについて待ち時間が長いなどの意見があったものの概ね好評であった。今後も継続していく予定であるが30歳代から50歳代の参加の増加が課題と思われる。今年末には新病院が完成し、より一層地域医療が推進できるよう貢献したい。

## P1-48

健康寿命延長に向けた取り組み  
～糖尿病週間の公開教室を活用したフレイルの現状把握と今後の課題抽出～

白村聡子<sup>1,2</sup>、渡辺智恵美<sup>2</sup>、金丸ユミ子<sup>3</sup>、加藤綾<sup>4</sup>、中村蒔友<sup>5</sup>、日比野春美<sup>6</sup>、  
岩野江利<sup>7</sup>

<sup>1</sup>JCHO可児とうのう病院 糖尿病ケアチーム、<sup>2</sup>看護部、<sup>3</sup>検査部、<sup>4</sup>薬剤部、  
<sup>5</sup>リハビリテーション科、<sup>6</sup>栄養管理室、<sup>7</sup>医療連携室

【目的】糖尿病週間でおこなった糖尿病公開教室（以下教室）の健康チェック表とフレイルの評価指標を元に、健康認識と実際の結果から今後の取り組み内容を検討する。

【方法】自由意思で参加した地域住民に、健康チェック18項目と握力測定を実施、参加者の健康意識と握力測定値を比較、研修後のアンケートをもとに分析する。

【倫理的配慮】参加者へは、口頭及び書面にて説明し、健康チェック表の提出をもって参加の同意とした。

【結果】健康チェック表の提出者は男女26名で、60歳代10名、70歳代16名であった。運動に関するセルフチェック3項目では、「1回30分以上の汗をかく運動を、週2回以上、1年以上実施している」者が46%、「日常生活において歩行または同等の身体活動を1日1時間以上実施している」者が62%、「ほぼ同じ年齢の同性と比較して歩く速度が速いと思う」者が58%であった。しかし、握力測定では年齢、性別に合わせた平均値表と比較すると、69%が基準値以下であった。また、理学療法士による運動体験では、参加者より「楽しく運動できた」「この運動は自分でもできる」との声が聞かれ、教室終了後の4段階アンケート調査においても26名（100%）が運動体験が「たいへん良かった」「良かった」を選択されていた。

【考察】フレイルとは様々な生理的予備能力の低下に伴い健康障害が生じやすい状態を示すが、しかるべき介入により再び健康な状態に戻る可能性がある状態も含まれている。今回、運動に関するセルフチェック3項目の結果から、健康意識の高い方が参加されていると予測されたが、握力測定値は、年齢平均値に満たない者が69%であった。教室の参加者は、健康志向が高いと予測されたが、このような結果であった。したがって、同年齢の地域住民はこれ以上に運動能力の低い方が多いと予測される。そこで、地域に向けた講座などは、自宅で行える運動など中心とした内容を検討していくとよいと考える。

## P1-49

## 湯河原町における当院の訪問リハビリテーションの役割

高橋義之、柿沢健二  
JCHO湯河原病院 リハビリテーション科

【はじめに】湯河原町は高齢化率41.3%（平成30年1月時点）であり、当院はJCHO病院の中でも高齢化率の高い地域にある。現在、湯河原町には介護保険サービスで利用出来る訪問リハビリテーション（以下訪問リハ）事業所は2カ所であり、病院が事業所であるのは当訪問リハのみである。今回、我々は訪問リハの業務内容を調査し、この地域で果たすべき役割について検討したので報告する。

【方法】平成31年4月末時点で湯河原町在住の訪問リハ利用者を対象に利用目的、基本情報、実施内容をケアプラン、リハ記録から後方視的に調査した。情報を項目別に分類し、各項目の傾向から当訪問リハスタッフ間でこの地域での訪問リハの役割について検討した。なお、本研究は当院の倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

【結果】利用者に多く見られた特性は、利用目的が在宅生活維持、基本情報から後期高齢者、要介護状態、複数の合併症がある、居住環境は起伏のある地形やバリアフリー化されていない住宅が多かった。実施内容は合併症の悪化予防やADLの介助量軽減のために、身体機能、リスク管理、住環境整備、多職種連携等による介入が多かった。

【考察】湯河原町における利用者や地域特性から、我々は在宅生活維持のために高齢者や合併症に対する知識やリスク管理、身体機能、住環境整備等への介入を多く必要とされていた。また、訪問リハのみに止まらず、病院と連携して当院主治医や看護師、その他介護保険サービスとの連携も必要とされていた。したがって、在宅生活維持を目的とする利用者に対し、当訪問リハの役割は身体機能向上だけでなく、地域包括ケアシステムの一員として多角的な視点から利用者を捉え、多職種連携を促すことであると考えられる。

【結論】湯河原町における当訪問リハに必要な介入内容と多職種連携の必要性を再認識した。今後、当訪問リハのサービス内容の向上のために活かしていく。

**P1-50****当院の介護予防事業に対する参加者の満足度調査と今後の課題**

今克郁、西本良子、野瀬啓一郎

JCHO若狭高浜病院 リハビリテーション科診療部

**【はじめに】**

超高齢社会を迎えようとしている我が国において、人口約1万人の福井県高浜町も例外でない。平成30年の高齢化率の調査では全国の28.1%を上回る31.1%である。そこで健康長寿を掲げる同町から平成29年度より、当院リハビリテーション科に介護予防体操教室「元気あっぶ生き生き倶楽部」（以下、体操教室）を委託される。今回参加者の満足度や要望を把握するためアンケート調査を行った為、その結果を報告する。

**【対象】**

町内在住の65歳以上の介護保険未認定者に、療法士1名が町内4カ所の公民館を月2回（祝日を除く）の頻度で回る。90分間で体操や脳トレ、レクリエーション等を行う。

**【方法】**

平成29年4月～平成31年3月まで追跡し、年2回の体力測定と3月にアンケート調査を実施。アンケート内容は参加した感想、体操、脳トレ、体力測定、今後の参加希望の5項目を「大変良い～良くない」の5段階のリッカート尺度と体操教室への要望を記述式で回答を求めた。

**【結果】**

参加者は平成29年度87回の実施で実人数129名（男13名、女116名）、延べ人数1267名、1回平均14.6名。平成30年度94回の実施で実人数132名（男17名、女115名）、延べ人数1447名、1回平均15.4名。アンケートは平成29年度71名（回収率96%）、平成30年度62名（回収率98%）の回答を得る。体力測定以外の項目で約90%が好意的な意見を得る。特に今後の参加希望の項目では平成29年度98%、平成30年度95%であった。記述式ではより具体的な運動の希望だけでなく、他者と交流が持てる喜び等の意見も聞かれた。

**【結論】**

平成29年度より平成30年度で参加者の増加を認め、アンケートから体操教室への満足度や今後の参加意欲が把握できた。また、記述式によって参加者の運動強度や内容に個人差があることが把握できた為、今後の体操内容に反映することが必要である。最後に体力測定で高い数字を得られなかった原因を分析し、次年度以降に生かすことが課題である。

**P1-51****当院の短時間通所リハビリテーションの取り組み～外来リハビリテーションからの移行を通して～**

松本薫、小林健、加藤俊久

JCHO湯河原病院 リハビリテーション科

**【はじめに】**昨年度末に、要介護認定者の算定日数越えの外来リハビリテーション（以下外来リハ）が終了となった。当院ではリハ継続が必要な方の受け皿として、従来の通所リハから短時間型通所リハ（以下短時間リハ）へ移行し、昨年12月より開設した。短時間リハの取り組みや、事例を通して見えてきた役割や課題について、以下に報告する。

**【事例紹介】**Y氏、70歳代、男性。昨年より、左肩関節周囲炎による外来リハ開始。独歩は可能であるが耐久性は低く、軽度の認知機能の低下を認めた。家族関係の課題もあり、入浴習慣が破綻し、清潔が保てず、社会参加に支障をきたしていた。外来リハでは、生活面への介入は難しく、その面も加えてリハ継続が必要であり、今年より短時間リハ開始となり、入浴習慣の獲得を目標に介入を行った。機能的訓練は継続しつつ、関わりの中で入浴の重要性を理解して頂く働きかけを行った。同時に環境面への課題も見え、他職種連携を図り、福祉用具の提案も行った。

**【結果】**Y氏は週1回の入浴習慣が確立され、集団体操への参加や、他者の会話に耳を傾ける変化が見られた。

**【考察】**当院の短時間リハでは、医療兼務の訓練士が行うことで、機能的訓練は継続し、各利用者の生活環境に適した動作訓練や他職種連携を図るという役割が見えた。これは、ICFの活動と参加の視点をふまえた相乗的な効果が期待できると考える。当町は高齢化率40%以上で、Y氏のような機能低下や生活破綻をきたしている高齢者が多く存在している。そのため、日常生活における機能的自立を促すことが、社会参加のきっかけに繋がると考えた。今回、短時間リハとして、地域包括ケアシステムの役割を果たすことができた。今後の課題としては、短時間リハで得られた動作や活動方法を、自宅や地域の中で実践できるような移行先へ支援することである。これは、循環型の短時間リハへ運用させるためにも重要である。